

ジェームズ・デニーの生涯と神学（一）

松浦義夫

序論

日本のキリスト教会、特に、長老主義教会の伝統を継承した、戦前の「日本基督教会」においては、スコットランド神学が重んじられており、その日本の神学に与えた影響を、見過ごすわけには、いかないと言えよう。

これには、原因として、植村正久による、スコットランド神学の導入ということが考えられる。戦前の日本における、神学研究の姿勢をかいま見ることのできる一例として、植村正久の、いわば孫弟子として、神学生時代を過ごした、熊野義孝の晩年の対談をあげることができる。彼は、その対談の中で、当時を振り返りつつ、次のように語っている。¹⁾

〔植村先生より〕英国の神学者のものを読むよう

に言われてよく読みましたがね。一番よく読んだのがデニー。フォーサイスもですが、これは高倉さんになってからかな。デニーのほかにデール。デニーは読みやすかったし、これが必読書でしたね。」

また、このことは、一世代後にもかかわらず、やはり、スコットランド神学の与えた影響は、根強く継承されている。そのことを示す例としては、竹森満佐一が、東京神学大学を退官するにあたっての最終講義の中で、次のように語っている言葉が、記憶されるべきであろう。²⁾

「神学校にはいる前に、多少の準備をし、ギリシア語は、サナトリウムで、医者にかくれて独習したりしたが、林（三喜雄）先生は、J. Denney, The Death

of Christを読ませて下さり、わたしは非常に感動して二度読み、これがわたしの神学の勉強を決定づけたと言つてもいいのである。……当時、日本基督教会は、スコットランド神学の影響が強く、われわれの在学時代に、ドイツの神学がはいつてきた。……しかし、一般的には、スコットランド神学が強かった。しかし、スコットランド神学とはいつても、後になってみると、必ずしもそのままではなかった。スコットランドは、その伝統の中にヒュームを持っているくらい合理的であつたが、われわれが継承したのは、むしろ、贖罪的キリスト論的、教会的な面、総じていえば、改革派的な点であつたと言えよう」。

これらの言葉からもうかがえるように、日本のキリスト教会、とりわけ、植村正久門下にあつては、スコットランド神学、その中でも、ジェームズ・デニー James Denney の影響が、きわめて強かつたと見るこゝとができよう。

当時黄金時代であつたイギリス神学、その中でも同じ長老主義教会の伝統の下にあつた、スコットランド神学。しかも、アメリカにおいてはしばしば見うけられるような、教派的なドグマにしばられる、ということのない、より自由なしかも伝統を継承した神学を、

フォーサイス、デニー、デール等に見出し、それを日本の風土に移植しようと企てたのが、植村正久であると言えよう。それは、植村自身が、明治学院を退き、「東京神学社」を創立した時の事情からもわかるように、植村自身の目差していた神学に近いものを、これらスコットランド神学者の中に見出したのである。やはり、植村正久の卓見と言えるのではなからうか。とくに、デニーの場合は、彼の神学的著作が、ほぼすべて再版されており、ここ一〇年来、アメリカにおいて復刻版として出版されていることから、このように言えよう。しかし、これほどの影響を日本のキリスト教会に与えながら、デニーに関しては、今だに一冊の研究書も出されていないのは不思議としか言いようがない。おそらく、後にドイツ神学、中でも、カール・バルトの神学が、日本にも導入され、研究されはかりしれない影響力を持つにいたつたことも、その原因の一つとも言えよう。しかし、今日、もう一度、われわれの先輩が重んじたスコットランド神学を、見なおすことも、必要かつ重要なことと言えよう。

ところで、本論文でとりあげようとしているのは、このジェームズ・デニーの神学であるが、彼の神学自

体を研究する前提として、彼の生涯および、神学的背景、いわば、ガイストリッヒ・ハイマート die Geistlich-heimatをまず考察することによろう。

一人の人間が誕生する時、それはけっして in vacuo に、すなわち「真空状態」に、誕生するわけではない。一人一人が、いわば「時代の子」として産まれるわけである。この点に関して言えば、神学者とて例外ではない。いやむしろ、神学者こそ「時代の子」として、その時代の要求する、神学的問題に対する答えを、真面目からとりあげ、とりくみ、時代の人々に提示する、義務と責任を持っているといえよう。しかも、その神学的問題たるや、これこそまさに「真空状態」に産まれるものではなく、それ以前の伝統、歴史において受け継がれ、しかもその時代その時代に新しく、まさに「時の問題」として産まれ、問いなおされる性質を担っている。

デニーの神学を考察する際も、彼が継承した伝統、彼の生きた時代というものが問題となる。彼が受け継いだ伝統とは、もちろん、スコットランド教会の伝統、すなわち、「長老主義教会」の伝統であるが、同じ長老主義の教会であっても、スコットランドの国教会である長老主義の教会、すなわち、チャーチ・オブ・ス

コットランド the Church of Scotlandあるいはカーク Kirkと呼ばれる教会ではなく、自由教会の一つであり、後に「改革長老教会」the Reformed Presbyterian Churchあるいは「キャメロン派」the Cameronians or the Cameronian stockと呼ばれる教会の伝統であることが、注意する必要がある。そして、彼の生きた時代、特に、その時代の神学を語る場合、直接あるいは間接に影響を与えた、ドイツ近代神学、あるいは自由主義神学の流れ、中でも、アルブレヒト・リッテルおよび、アドルフ・フォン・ハルナック、等の神学者に代表される、「リッテル学派」との対話ないし対決ということが、デニー自身の神学を考察する際も、考慮に入れなければならない。

彼の神学を考察するに先だち、まず、デニー自身の幼年時代と、彼の受け継いだ教會的伝統を見て行くことにしよう。

第一章 幼年時代および教會的伝統

ジェームズ・デニーは、スコットランドの南西部の都市、ペイズリー Paisleyにおいて、ジョン・デニーの長男として、一八五六月二日五日に誕生する。ところで、植村正久は、一八五八年一月二五日に誕生して

いるので、デニーの方が植村より二才年長ということになる。しかし、同時代の人間、同じ「時代の子」と言ってさしつかえなからう。なお、デニーの父親は、建具組立てを業務とする会社を経営していたので、イエス同様、さしずめ「大工の息子」ということになる。デニーの生後四ヶ月にして、両親はグリーンノックに移住し、彼自身幼年時代を、このグリーンノックおよび、近隣の大都市であるグラスゴーで過ごすことになる。先述の通り、彼の両親は、「キャメロン派」あるいは「改革長老教会」と呼ばれる教会に属する、有力な会員であったことにより、デニー自身も、この教会の歴史の中に身を置くことになる。

ところで、この「キャメロン派」であるが、一七世紀、スコットランドにおいて、教会と国家の関係をめぐる争い、具体的には、国王の下に行なわれる「主教制」にもとづく、教会体制をめぐる争いの中から、起こった教派の一つである。当時、反「主教制」の指導者の一人であった、リチャード・キャメロン Richard Cameron の名にちなんで、このように人々からは呼ばれたが、自分たちは「改革長老教会」という名を正式名称としている。

一七世紀のスコットランドは、長老主義者たちにとつ

て、苦難の時であった。それは、スコットランドの国王であったジェームズ一世が、イングランドの王位も兼ねるようになって以来、元来、イングランドの国教として整えられつつあった、「英国国教会」の、教会政治体制「ポリティー」である、「主教制」をスコットランドにおいても行なおうとする国王側と、「長老制」をあくまで主張しようとする長老主義者たちの間に、騒乱が続いたためである。ジェームズ一世は、最初スコットランドの「長老主義教会」に属しており、イングランドの「英国国教会」に対しては、非難軽蔑を心に抱いていたが、一六〇三年、イングランドの王位に登るや、主教たちが、国王に対して、熱心に服従するのを見て、大いに喜び、自らも「英国国教会」に属すばかりでなく、君主政治にとって、長老主義は不相当と見なし、スコットランドにおいても、「主教制」を布こうとし、三名の主教を立て新しい規則を立案したが、この規則を実行することはなかった。ジョームズ一世の王位を継承したチャールズ一世の時代には、この騒乱がはげしく、そのきっかけを作ったのは、チャールズ一世自身であった。彼は、イングランドとスコットランドを、教会としても統一化し支配しようとしていた。本来は、「英国国教会」の使用していた、主教

ロード作製の『祈祷書』を、スコットランド教会においても使用すべきことを命じた。元来スコットランドにおいては、ジョン・ノックス作製の『祈祷書』を使用したこともあったが、今回ロード作製の『祈祷書』に対しては、その使用に熱心に反対した。その理由は、「大会」の決議によるものではなく、牧師たちの希望

でもなく、また、一般の信徒たちの請願によるものでもなく、ひとえに、国王の命令により使用させられようとしたからである。すなわち、国王は、教会の礼拜に干渉する権利がないとしたのである。また、この『祈祷書』は、ローマ・カトリック教会の祈祷に模倣したもので、プロテスタントには不適當としたことも理由にあげられる。しかしチャールズ一世は、一六三七年七月二三日、スコットランドの首都である、エディンバラの聖ジャイルズ教会において、この『祈祷書』にもとづく礼拜を強行しようとし、これをきっかけにエディンバラにおいて、続いてスコットランド全土において、「主教制」反対の騒乱を招くことになった。翌一六三八年二月には、「真の宗教を擁護するために」という内容を持つ、「国民契約」National Covenantが、長老主義者多数によって署名され、同年一二月には、スコットランド教会の最高の議決機関である「総

会」General Assemblyにおいで「主教」たちを免職し、ジェームズ一世およびチャールズ一世によって設立された、教会の全機構を否認した。この時以来、「国民契約」を支持する長老主義者たち、すなわち「カベナント派」の人々と、「主教制」を回復しようとする国王との間に、争いが続くことになる。

イングランドにおいても、チャールズ一世に対して、ピューリタンたちが反乱を起こしスコットランドの助力を受けようと同盟を結び、その契約を承認したばかりでなく、ウェストミンスター会議には、スコットランドからの使者も派遣、出席し、『信仰告白』を制定した。イングランドにおける独立派は、次第に勢力を増し、ついに、一六四九年、国王チャールズ一世を処刑し、クロムウェルが国家の保護者として政権を握った。スコットランドの人々にとっては、チャールズ一世は依然として「主の油注がれた者」であったので、国王を処刑することを不可とし、クロムウェルに服する意志はなかったが、強力な軍隊を背景にクロムウェルは、スコットランドをも支配下においた。しかし彼は、スコットランドの教会に干渉することはなかった。王政復古の時代は、長老主義者たちにとっては、特に混乱と苦難の時となった。クロムウェルの死後、ス

コットランドも、チャールズ二世を国王として歓迎した。彼は、スコットランドの血統であり、しかも、即位前には教会を保護するとの約束を承認していたからであるが、長老主義者たちは、チャールズ二世に対して失望し、かつその圧政により苦難に遭遇することとなる。すなわち、一六六一年の議會は、一六三三年以来、長老主義教会にとって有利と成っていた、すべての法律を無効とし、こうして、「主教制」が回復された。この時四人の主教が任命され、ジェームズ・シャープがセント・アンドルーズ管区の天主教となつた。教職者の按手は、イングランドの教会によってなされた。シャープはもと長老派の教職であつたが、自らの党派と教会を裏切つたのである。また、すべての官職にある者は、「国民契約」を否認することを要求された。「主教制」の回復にともない、多くの長老主義の教職者たちは、特にスコットランド南西部を中心に、すべての資格を奪われ、教会員たちも、「主教制」の下に新たに任命された教職者の執行する、礼拝への出席が強要された。これに従がわない場合は、罰金を課せられ、また、もしその支払いが、とどこおる場合には、兵士が派遣された。さらに抑圧の手段として、「高等宗務法院」が設置された。この後、「カペナント派」

は武装蜂起を行い、それは容赦なく鎮圧され、官憲に追われる身となつた。この間に、天主教シャープが暗殺され、反乱は撃滅された。こうして、今や法律の保護を失い、追われの身となつた、非妥協的長老主義者たちは、その指導者の一人であつた、リチャード・キャメロンの名前から、「キャメロン派」と呼ばれるようになった。

チャトルズ二世の王位を継承した、ジェームズ二世の即位後一年は、まさに「殺人の時期」であつた。彼は、「キャメロン派」の弾圧を一層強化するばかりであつた。一六八五年の議會は、「秘密集会」conventicleに出席することに対して、死刑を課した。しかし、ジェームズ二世は、イングランドにおけるのと同様の途をたどり、「枢密院」を、ローマ・カトリックの教徒によって埋め、一六八七年「寛容の書簡」を公布し、ローマ・カトリック教徒の礼拝の自由を公認した。このことにより、すべてのプロテスタント諸教派の反感をかきたて、さらに「主教派」をもまきこみ、ついに「名譽革命」をまねくことになる。そして、これにもない、スコットランドにおける騒乱は、一応の決着を見ることになる。

一六八九年五月一日、ウィリアムとメアリーが、

イングランド同様、スコットランドの支配者となった。翌一六九〇年、議会は、王制復古以来放逐されていた、すべての長老主義の教職者たちを復帰させ、『ウエストミンスター信仰告白』を裁可した。さらに、「長老制」を政府により公認されたポリティーである、との宣言をした。ここに、国教会としての「長老主義教会」である、「チャーチ・オブ・スコットランド」の再出発が行なわれたのである。しかし、「キャメロン派」の人々は、「法的国教化による長老主義教会は、世俗の権力により支配された制度であり、国民契約の精神に反する」として、これに参加せず、「改革長老教会」を創立し、独自の道を歩むことになる。

元来、「長老主義教会」あるいは「改革派教会」と呼ばれる教派は、宗教改革者の、ジュネーブのジャン・カルヴァンの神学を受け継いでおり、その教会観も、彼の神学の影響下にあるといえよう。カルヴァンの神学の中心は「ただ神にのみ栄光」*soli Deo gloria*であり、神にのみ絶対的支配を認め、世俗の支配者が、教会を支配することを認めない、という気風がある。すなわち、教会と国家は常に緊張関係にあり、今日の用語で表現すれば「政教分離」を求める流れが、底流として流れ続けている。このことは、スコットランドに

おいては、「キャメロン派」ばかりでなく、「長老主義教会」を旗印に掲げる、「チャーチ・オブ・スコットランド」においても、底流において、神学的伝統として流れ続けていた。そして、この流れがやがて地面に噴出する時が来るのである。

一七〇七年、イングランドとスコットランドは合併され、「グレート・ブリテン」という一つの王国と成ったわけであるが、スコットランドにおける教会は独立の諸権利は保証された。しかし、一七二二年、アン女王の下議会を通過した「パトロン制」は、やがて無数の問題を生じる原因となった。この制度によると、「牧師推薦権」は、通常、国王または大土地所有者が有することになる。もし教会員たちが、牧師の任職に反対しても、この制度により、「牧師推薦権」を有するものが強制的に、その牧師を任職することもできるという内容であった。すなわち、牧師を選ぶにあたって、教会員たちの権利、意志が制約を受け、一部の世俗の権力者によって、教会が支配されることにもなりかねないものであった。

早くも、一七三三年には、スターリングのエベニーザ・アースキン *Ebenezer Erskine* が、この制度に対して公然たる非難を表明したため、論争をまき起こし、

ついに、一七四〇年、「総会」は彼を免職した。しかし彼は、この免職の手続きが終了しない間に、若干の仲間とともに、スコットランド最初の自由教会を創立することになる。これが後「分離教会」the Seession Churchとして知られるようになったものである。この教会は、急速に成長し、まもなく教会内の分裂が起こり、「公民派」Burgherと「反公民派」Anti-Burgherに分かれ、さらに、この中でも分裂が起こったが、一八二〇年には、その大部分が再合同して、「合同分離教会」the United Seession Churchを創立した。ところで、このエベニーザー・アースキンは、弟のラルフ・アースキンと共に、一八世紀初期のスコットランドにおける、福音主義運動の指導者である。エベニーザーは、説教により多数の会員を引きつけ、一七一四年までには、教会に入りきれない群衆のため、自らの牧する教会の隣接地において野外説教をしなければならぬほどまでになっていた。例の「牧師推薦権」の制度のため、しばしば、より福音派的な牧師を選んだであろうような教会においても、いわゆる穩健派の牧師が、強制的に任命されている。このように、福音主義運動にかかわる人々からは信じられていた。エベニーザー・アースキンは、「牧師推薦権」の制度を非難した背景

には、このような、福音派排斥にこの制度が利用されるというケースが、実際にあったと考えられる。保守的大土地所有者たちは、力を持ちつつある中産階級の間急速に広まりつつある、福音派を、好ましく思わなかったであろう。

同じような事件は、カーノックでも起こった。トーマス・ギレスピー Thomas Gillespie は、教会員の反対の意志を無視して、ある牧師を、「牧師推薦権」によりその教会に対して、強制的に就任させようとした際、その牧師の任職式に参加することを拒否し、こういう型で、この制度に対する非難を表明した。このため、彼は、一七五二年の「総会」において免職されてしまった。しかし、一七六一年には、彼は同志たちとともに、後に「救助教会」the Relief Churchあるいは、「救助大会」the Relief Synodと呼ばれるようになる組織を創立した。先述のアースキン兄弟に由来する「合同分離教会」と、このギレスピーに由来する「救助教会」は、後、一八四七年に合同し、「合同長老教会」the United Presbyterian Churchを創立する。この教会は、日本においては、「スコットランド一致長老教会」として知られ、「日本基督一致教会」を構成する三ミッションの一つとして、日本に宣教師を派遣し、一九〇

〇年に「合同自由教会」として再合同するまで、良い神学的影響を与え続けたが、再合同により、宣教師が帰国することになる。

一九世紀のスコットランドにおいても、なお一層、福音派の勢力は強まり、いわゆる、「リバイバル運動」が行なわれることになるが、その中で最も有名な指導者の一人が、トーマス・チャーマーズ(Thomas Chalmers)である。彼は、一八一五年、グラスゴーで牧会を始め、以来、福音派の最も有力な指導者となったが、その指導の下、福音派は急速に力を増し、一八四一年までには、一般人の献金により、二二〇もの新しい教会が創立された。しかし、この間にも、「牧師推薦権」をめぐる以前からの問題は、くすぶり続けていた。力を急速に増しつつあった福音派は、一八三四年、「教会員の多数が反対した場合、中会は(プレスビテリー)、牧師の任職式を強行することを禁ずる」規定、いわゆる「拒否権規定」を、チャーチ・オブ・スコットランドの最高の議決機関である、「総会」(General Assembly)において通過させることに成功した。これによって、世俗の権力の支配が教会におよぶのをくい取めようとしたわけだが、国の法令である「パトロン制」に抵触することから、間もなく法律論争を招くことになる。

国家の法廷は、「総会」の越権行為と判断。チャーマーズたちは、議会に応援を求めたが、議会もこれを拒否した。このため、チャーマーズの指導の下、四七四人の福音派教職者は、一八四三年、チャーチ・オブ・スコットランドより離脱し、教会と俸給を返上した。そして、自分たちの献金で維持する、自給教会を創立し、「スコットランド自由教会」(the Free Church of Scotland)として出発することになる。この時、これに参加した信徒は、国教会の実に三分の一にもあたり、しかも最も活動的な福音派と呼ばれる勢力であった。この事件を、「分裂」(Disruption)と呼んでいる。この時、チャーマーズの努力がみのり、「維持基金」が創設され、教会員一人一人が当時の金額で、毎週一ペニーずつにあたる額を献金することになった。そして、この「自由教会」には、一八七六年、「キャメロン派」の人々の大多数が合同し、さらに、一九〇〇年には、先述の「合同長老教会」との合同が実現し、「合同自由教会」(the United Free Church)を創立することになる。ここに、スコットランドにおける福音派の一大合同が実現することになる。

これが、デニーの属する教会的伝統ということになる。すなわち、デニーは、スコットランドにおける、

最も初期の自由教会以来の流れ、すなわち、世俗の権力が教会を支配するのを好まぬ、長老主義教会、あるいは改革派教会とよばれる教会の神学的伝統の中にある、しかも、一八世紀以来の福音派の伝統の中にも身を置くことになるわけである。

さて、主題を再び一八五六年にもどし、デニーの誕生後の歩みを見ることにしよう。

ジェームズ・デニーは、両親とともにグリーンノックに移った後、その地にある「ハイランダーズ・アカデミー」に入学、初等中等教育を受ける、この学校における最後の四年間を「ビューピル・ティーチャー」として、将来ハイスクール教師をめざしつつ、教師の指導下に助手をつとめ、同時に生徒として学問に励んだ。この制度は、現在行なわれていないが、当時としては、教師を目指す優秀な生徒が、歩む一つのコースであった。そして教師を生涯の職業とすべく、高等教育を受けるため、グラスゴー大学に入学することになる。時にデニー一八才、一八七四年一月のことである。そこで、次にデニーの大学生時代を見ることにしよう。

第二章 大学生として

一八七四年一月、一八才のデニーは、スコットラ

ンド南西部の大都市、グラスゴーにある大学に入学することになり、ここで、彼は、主に西洋古典と哲学を学ぶことになる。

デニーは、グラスゴー大学に在学中、西洋古典、すなわち、ラテン語およびギリシア語にすぐれ、数々の賞を獲得している。そのうちのひとつとして、「ブラック・ストーン・エグザミネーション賞」というのがあるが、これは、「黒大理石」の椅子に座して、受験することから、こう名づけられている。この試験では、受験者は前以って、自分の翻訳できるラテン文学の著書名とその数を申し出、その中から、試験官が示した文章を、即座に朗読し翻訳する、という形式を取る。答えられた書物の数が最も多い人物に、金メダルがあたえられるが、デニーはこの試験で一位を獲得した。さらに、「ジェフリー賞」と「コーワン賞」という同様の試験においても、一位を獲得し、言わば、西洋古典において「三冠王」となったわけである。

哲学の分野においても、首席で卒業するが、この時、デニーの師にあたるのが、例のエドワード・ケアード Edward Cairdである。この人物は、オックスフォード大学「ベリオル・カレッジ」において、ベンジャミン・ジョウエットのもとに、哲学および神学を学び、

同カレッツのトーマス・ヒル・グリーンとともに、英国における「新ヘーゲル派」の代表的人物と目されている。彼は、当時のドイツの哲学、特に宗教哲学を英国に導入し、イングラントおよびスコットランドの学生に、大いに影響を与えるが、ジェームズ・デニーもその中の一人と思われる。しかし、デニー自身は、スペキュレーティブなケアードの思想を、そのまま受け入れたわけではない。デニーは、師を通して、ドイツ近代神学、自由主義神学に接触を持ったと考えられるが、後に神学的著作を世に出すころには、すでにそこからぬけ出ている。

ケアードの考える、神概念は、次のようなものである。「われわれ人間自身の能力の中には、何か深遠な感情、崇敬の念、無限者への憧憬というようなものがあるが、これらのものが、宗教的意識を高揚させ、神に近づけるが、無限者は有限のうちに自らを実現し、啓示する。神はわれわれの知識をはるかに起えるものを有するが、これは礼拝すべきものである。しかし、これは永遠の神秘というようなものではなく、今はまだ知られていないだけである。たしかに神は、われわれが把握することのできる以上のものを持っているが、にもかかわらず、永久にわれわれの認識を超えたもの

ではなく、人間によって、自らの経験と思想の中に、いずれは到達し得るものである」⁴⁾。またキリスト教については、「古代の諸宗教に含まれている真理が、どのようなものであれ、またその光がどのようにさえぎられ、散らされたものであれ、キリスト教は、これらのうちのよきものを、自らの内に取り入れ、すべてを説明し、すべてを調和させ、宗教的錬金術によってことごとく変化させ、しかもすべてを超越している」⁵⁾との理解となる。

このようなケアードの神概念、キリスト教理解は、次に示すシュライエルマッハーの理解にきわめて近いものである。彼によると、「人間は、自身一つの小宇宙(ミクロコスモス)であり、宇宙の映像である。普遍的で永遠なるものと較べる時、人間は自身を有限で限界をもち、はかないもの、一言で言えば依存的である、と感じる。この感情、すなわち絶対依存の感情が、あらゆる宗教の基盤である。普遍的なものと有限的なものとの間に横たわる、深淵に橋わたしをすること、また人間を神との調和の中に導き入れることこそが、すべての宗教の目差すところである。それぞれの宗教の価値は、あらゆる宗教の目差す結果が、どの程度に達成されているかによって計られねばならない。それ

ゆえ、諸宗教は、真の宗教と偽りの宗教に分けられるべきではなく、人間を神との調和にもちきたらすにあたって、その宗教がどの程度適切であるかという、相対的な度合いに応じて分けられるべきである。歴史を通じて見られる宗教の進歩こそ、真の意味での啓示であり、人間の意識に対し内在的な神の十全な顕現なのである。このような見地から、歴史上存在する諸宗教のうちキリスト教が最善のものと言える」。

ケアードのシュライエルマッハーへの接近は、両者とも、ヘーゲル哲学のシステムによって、神およびキリスト教を組織的に取らえているためと思われる。このようなケアードのもとに哲学を学び、しかも最も優秀な学生であったデニーは、哲学を研究すればするほど、キリスト教は、いかなる哲学的システムによっても組織化できない、と考えるようになる。また、ケアードのように、いわば主観的に神をとらえるのではなく、「われわれの外なる」*extra nos* 救いが、イエス・キリストという客観的、具体的な姿で、しかも「われわれに対して」*pro nobis* 実現した点を強調する。また、ケアードによれば、やはり、キリスト教はいわば、諸宗教の中の最善のもの、あるいは、最も「進化」したものである。このような考え方からすると、

キリスト教と他の宗教は、いわば程度の差はあっても、本質的なあるいは、絶対的な差を持たないことになつてしまわないであろうか。すなわち、キリスト教は諸宗教に対して *primus inter pares* の位置を占めるにすぎなくなる。これに対してデニーは、あくまでキリスト中心のであり、他の宗教および思想は、「キリストの光」によって、その真理を判断されるべきである、という考え方である。デニーにとっては、問題は、われわれにとつて、良いかどうか、あるいは有益であるかどうか、というのではなく、真理であるかいなか、ということになる。しかし、デニーがケアードから継承したと考えられる点も、見のがすわけにはいかない。ケアードにとっては、すべての概念は、表面上いかに対立するものであっても、深く分折することによって対立を起えた、統一される中心があると理解される。したがって、彼の場合は、分折は、統合および再構成のための予備的考察であり、目標はこの統合点を発見し明示することである。この点に関して、デニーの場合も、分折の対称は、『新約聖書』の諸文書であるが、この分折的研究という予備的作業により、表面上の相違を起えたところに、『新約聖書』の中心統合点を発見し、明示しようとするところには、ケアードから継

承した研究の姿勢がうかがえるのではなからうか。

デニーは、このようにグラスゴー大学において、哲學および文学において、同時に首席で卒業し、周囲からは、文学の分野での研究を続け、学者となると思われまた期待もされていたが、卒業後、約半年の間ドイツ旅行の後、一八七九年一月、自らの属する「自由教会」の、教職者養成機関である、グラスゴーの「自由教会カレッジ」Free Church Collegeに入學するのである。時に、デニー二三才であった。

第三章 神學生として

デニーが入學した当時、「自由教会」ではどのような動きが見られ、また、デニー自身はそれをどのような受けとめていたのだろうか。ここに、デニー自身の考えを示すものとして、彼が入學する前、旅行先のドイツのドレスデンから、両親にあてた手紙がある。この六月二五日付の手紙に、この間のことがよくうかがえる内容が読み取れる。

「またまた、教職者が、方向転回をなしつつあるとか。喜ばしいたよりが耳にとどきました。スコットランドでは、今や、教職の方たちにとって、なにかすばらしい時がやって来たようです。何か偉大な事業がな

されつつあるような、そんな気がします。しかし、例の事件は、生まれつき平和を好み、愛すべき性格のわたしのようなおとなしい人間には、かなりの脅しとなります。彼らの教えに従うなど、そう言って脅されているような気がします。しかし、まだ彼らの考えに従うかどうかさえわからないうちから、恐れをなして、教職になるのはやめようなどは、言うべきではないと思います。しかし、正直なところ今までは、尊敬すべきグリーンノック・プレスビテリーが、自分たちのヘブライ語の物差しで私をためしてみても、私には欠陥あり、と決定するようになってしまわないか、と考えています。とにかく、『自由教会』であろうと何教会であろうと、こんな方式で、自分たちの神學生の正統性が保証できると考えたり、あるいは、神學生に教授たちの言葉に耳をかさないようにさせること、すなわち、神學生が神學生でありえなくさせることによつて、そもそも何かを守れるとでも考えているとしたら、それは、大いにまちがっています。」

この手紙の中で、「例の事件」というようにデニーが記しているのは、当時、「自由教会」内で、論争の中心となっていた、『旧約聖書』の研究方法および「聖書の無謬性」をめぐる事件のことである。そ

の中心人物は、アバディーンの自由教会カレッジの、オリエント諸語および旧約解釈学担当の、ウィリアム・ロバートソン・スミス William Robertson Smith である。アバディーンにおいて、一八七〇年以来、教授の職にあった彼は、同じころ、セント・アンドリューズ大学の、スペンサー教授の要請により、『ブリタニカ百科辞典』第九版に寄稿することになった。彼は、聖書、特に旧約聖書の歴史的批判的研究方法に関して執筆したが、問題が非常にデリケートな内容であった。当時、神学校では、まだ伝統的聖書理解による解釈が教えられていたが、それとはかなり違う、当時の最先端の研究方法を紹介する意図があった。ロバートソン・スミスは、ドイツの学会においても学問性にすぐれた研究者と認められており、当時の最も新しい研究方法に詳しく、しかも神学校の旧約学教授でもあることから、最適任の人物と考えられたわけである。また、彼は聖書改訂委員会の、旧約部門の委員にも選ばれており、スコットランドはもとより、英国を代表するような旧約学者として、国の内外で高い評価を受けていたところが、実際に彼の論文が寄稿され、出版されるようになる一八七五年ごろから、「自由教会」内の有力なメンバーによって、彼に対する「異端」の嫌疑が掛

けられた。一八七六年の「総会」において、「調査委員会」がもうけられ、翌一八七七年、委員会は、ロバートソン・スミスに対してあまりにも不利な内容を持つ報告書を提出した。彼はやむなく、委員会の報告は中傷と偏見によるものとし、正式に反論し、自身の聖書観を述べることになる。また、同教会のグラスゴーにある神学校である、「自由教会カレッジ」、すなわちデニーの入学することになる神学校の、歴史神学担当の教授である、トーマス・マーティン・リンゼイがロバートソン・スミスの弁護にあたることになったが、事態は好展せず、彼は、一八七八年には、事実上、教授職を停止せざるをえなくなった。このような中でも、『ブリタニカ百科辞典』への寄稿は続けられたが、彼の説はまげて受け取られ、あたかも、「聖書は、神の真理に対する、信頼できる資料を提示していない。神は聖書の著者ではない」と彼が記しているかのように誤解され、論争はなお続けられ、一八八一年、彼はついに、「教授不信任」の投票にかけられ、教授職を免ぜられた。しかし、このことがかえって、彼の学識の高さを知らしめる原因となり、一八八三年には、ケンブリッジ大学より、アラビア語学科教授として招かれることとなる。この後も『ブリタニカ百科辞典』への

寄稿を続け、さらに、スペンサーを助けて、『ブリタニカ百科辞典』第九版を完結に導いた。

これがデニー入学前の、「自由教会」における状況である。これでもわかるように、「自由教会」においては、今だに、いわゆる「正統主義」的な聖書解釈が有力で、いわゆる聖書の歴史的批判的研究を敵視する傾向にあった、といえる。たしかに、「自由教会」の成立における、歴史的背景、神学的伝統を考えると、すなわち、福音派の流れを考えると、ファンダメンタリストないしは、それに近い人々、あるいは、ドイツ風な神学を敵視する傾向にある人々が多数を占めていたこともうなずける。しかし、一方、「自由教会」の研究機関である、神学校自体においては、教授たちの中に、歴史的批判的研究方法を採用しつつある人々がいる、ということもわかる。そして、デニー自身は、学問的なより自由な立場に、好感を持っているということがうかがえる。この、ロバートソン・スミスの事件は、「自由教会」内外に、様々な反響を呼び起こし、後には、デニー自身も、またデニーの師であるアレキサンダー・バーメイン・ブルースも、この「聖書の解釈方法」、「聖書靈感説」、「聖書の無謬性」等をめぐる問題と深く係わりを持つことになる。

このような状況のもと、デニーは、一八七九年一月、グラスゴウの「自由教会カレッジ」に入学する。彼の入学した当時、この神学校には、それぞれの分野で第一級の学者、教授たちが並んでいた。先述のリンゼイ教授は、教会史の専門であり、特に「宗教改革」の時代を研究していた。彼は、一八七二年以来、この神学校で教鞭をとっていたが、教会史を教授する一方、「自由教会」の海外宣教委員会の委員長としてもおいに活躍し、神学生だけでなく、「自由教会」全体に影響力を持っていた。当時、英国の植民地を中心に宣教師および、神学教師を派遣していたが、デニー自身も、卒業時には、カルカッタにある「自由教会」系の神学校のポストを希望した、というエピソードがある。デニーの場合は、結局本人の希望はかなわず、国内の宣教および神学教育に活躍することになる。ところで、リンゼイの業績をあげると、まずあげるべきものとして、『ブリタニカ百科辞典』第九版への寄稿がある。先述のように、同辞典に寄稿した、ロバートソン・スミスに対して起こされた、例の論争においては、友人として、彼の弁護に最大の努力を傾けたわけである。この他に、『ケンブリッジ近代史叢書』第二巻における、「ルター」の項目、『ケンブリッジ中世史叢書』第

一卷における「キリスト教の勝利」の項目、『ケンブリッジ英国文学史叢書』第三巻における、『英国人と古典文学復興』の項目、著書としては、『ルターとドイツ宗教改革』、『ヨーロッパ宗教改革史』等があげられる。いずれも、高い評価を受けている。彼の研究方法は、同時代の社会全体のコンテキストから、教会史の特色を浮ばりにするというものである。そのため、諷刺画とか、服装のデザイン画なども有力な材料として、社会および家庭生活に見られる、その時代の特色と、それに伴って変化する、宗敎生活の特色を明らかにするというようなやり方を採用している。いいかえると、人間の社会的営みにおける、教会の歴史の発見ということになる。こういうとらえ方は、デニー自身にも見られ、「社会、文明社会における、全人格をもって生きる人間の、キリストに対する信仰」というような型で継承されている。

この他、教授たちの中には、ヘンリー・ドラモンド Henry Drummond がいた。彼は、アメリカの大衆伝道者であり、「第二次覚醒運動」の推進者である、ドワイト・ムーディーおよびアイラ・サンキーとともに、一八七四年四月から一八七五年七月まで、アイルランドおよびイングランドにおける諸都市において、リバ

イバル運動に参加し、良き協力者また同志として活躍し、そのため、アメリカ帰国後のムーディーから、フィラデルフィアにおける宣敎活動への協力の要請があった。しかし彼自身は、スコットランドにとどまり、グラスゴウの神学校で、「自然科学」の教授となった。神学においては、自身、地質学の専門家でもあったためか、自然科学と信仰の調和をはかろうと研究をすすめる、『霊的世界における自然法』や『人類の進化』などの著作がある。しかし彼の理解は、「生存競争は、序々に利他的なものとなり、他者の生存のための競争という性格を持つようになる」というもの、あるいは、「進化の目的は愛である」との理解は、自然科学者からも厳しい批判を受けると同時に、神学者たちからは、「進化論」を提唱したダーウィンやハーバード・スペンサーに心を寄せすぎるとの批判を受けた。中でも、デニー自身、最初の著書は、彼のそういう面への批判であり、最も理論的批判として知られている。ところで、ドラモンドの信仰は、「贖罪論」を中心にすえた、素朴で健全なもので、そこから生じる道德的な生き方は、若い世代の人々に多大の感化を与え、人間としてより高尚な道德的な生き方を求める刺激を、彼自身の生き様を通して与え続けた。ドラモンドは、長

老派の伝統である、「贖罪」と「聖化」を、だれにでも理解できる言葉で説教し、特に、知識階級に対する影響もかなりのものであった。デニー自身も、後『神学研究』の中に、直接間接に彼について言及し、特に説教の分野でかなりの影響を与えられている、と考えられる。また、ドラモンドは、世界各地に伝道の輪をひろげ、オーストラリアから帰国の途、日本にも一時立ちよっている。彼の説教および講演は、いわば「倫理的圧力」を持っており、いわば、「その神学よりもさらに善き神学者」と言いうる人物であったと思われる。デニーにとっては、神学者あるいは神学の書は *moral backbone* を欠いている場合、神学者でも神学の書でもない、と考えるが、その意味では、ドラモンドは、デニーにとって神学者のあり方を示す存在であったと言えるのではなからうか。

さて、神学校の教授の中で、忘れてはならない人物、デニーの生涯の師とも言える人物、それは、アレキサンダー・バーメイン・ブルース Alexander Balmain Bruce である。デニーは彼について、多くを語らないが、實際上、彼の後継者として、牧師となり、神学者となることになる。

このブルースは、一八三二年、スコットランドのパー

スチャイアに生まれ、エディンバラ大学を経て、グラスゴウの「自由教会神学校」Free Church divinity Hall を卒業、ダムバートンシチャイアのカードロスで一八五九年より一八六八年まで、ダンディー近郊のブルーティール・フェリーで一八六八年から一八七五年まで、牧会生活を営む。デニーは、後、このブルーティールで、ブルースの後継者として牧師となる。ブルースが、カードロス時代に行った、福音書研究と、それに基づく説教は、後書物として、一八七一年、『一二使徒の訓練』として出版された。また、一八七四年には、「カニングム・レクチャー」の講師として、エディンバラ大学に招かれ、後『キリストの謙卑』として出版した。この両書によって、彼の名声は高まり、特に、『一二使徒の訓練』は、今日においても、アメリカにおけるキリスト教図書の中で、毎年ベストセラーにあげられているぐらいである。

ところで、ブルースの場合も、先述のロバートソン・スミスと同様、学問的標榜は、ドイツにおいても高く認められていた。その学風は、保守的福音派的信仰を継承し、伝統的神学を重んじながらも、当時としては最新の歴史的批判的研究方法を採用し、自由主義神学、その中でもラディカルな「チュービンゲン学派」の研

究をも、批判的に充分考慮する性質のものであった。福音的信仰の立場を堅持しつつも、従来の伝統にとらわれない、当時としては大胆な仮説を、発表することもしばしばあった。そのため、「自由教会」内の正統主義的保守派の人々からは、かならずしも喜ばれなかった。一八七五年以来、グラスゴウの神学校で「新約聖書神学」担当教授の要職にあったブルースは、重要な著作を出版し続け、中でも、『エクスポジターズ・グリーク・テストメント』シリーズの『共観福音書』は有名で、今日も版を重ねている。ちなみに、同シリーズの『ローマ人への手紙』は、デニーが著している。

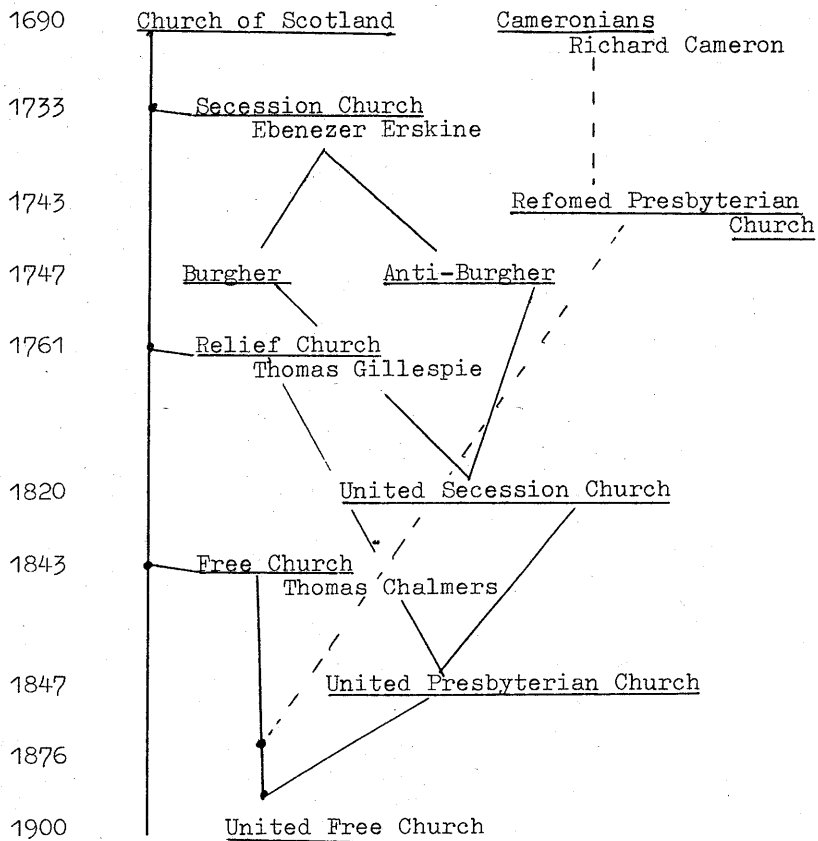
先述のように、保守派から批判されたものとしては、一八八九年に著した『神の国』あるいは、福音書におけるキリストの教え』があげられる。この著書において表現される、ブルースの「聖書の靈感」に関する理解と、聖書研究の方法論が「自由教会」の中で問題となった。約一〇年前に起こった、ロバートソン・スミスの事件のむしかえしかと思われたのである。しかし、この一〇年という年月は、聖書の学問的研究方法の進歩と、それが受け入れられるようになるためには、けっして長い年月とはいえないのだが、結局、同様の嫌疑をかけられた、マーカス・ドッズとともに「総会」に

おいて論議されたが、「両者の仮説には、若干、誤解を招くように思われる点はあるものの、教会の信仰基準にはずれるものではない」という決議がなされる一幕もあった。いづれにせよ、デニーが神学生時代をおくる期間に、「自由教会」は、学問的でありつつ、しかも教会を建てるに有益な研究方法を、求め受け入れていった。というように見ることができよう。

このような時代の中で、このような教授たちにかこまれ、デニーは神学生時代を過ごすわけである。しかし、デニー自身の神学が展開されるのは、もちろん彼が、牧師として、また後には学者として、研究活動を続けるようになってからである。われわれは、ようやく、デニー自身の著作、説教、社会的活動を調査、考察することのできる時点にまで、たどりつくことができた。したがって、冒頭にも記したごとく、デニーのガイストリッヒ・ハイマートを一応考察し終えたことになる。

ここで、デニーのいわば「公生涯」を先取りして記すなら、*ecclesia semper reformanda*の一員として、つねに「神の言葉」にたちかえり、しかも宗教改革者カルヴァンの神学を、今(こゝ)で *hic et nunc* 新しく、「時代の子」として、しかも *non multa sed multum*

☒ Churches in Scotland 1690-1900



————— チャーチ・オブ・スコットランド系
 - - - - - キャメロン派系

と呼ぶにふさわしく、「キリスト論」、「贖罪論」に集中して、神学的に展開させていく、その生涯と言いうるのではないか。

これをいわば前提として、デニーの神学校卒業後の生涯への考察に進むことにする。

(以下次号に続く)

注

- (1) 『熊野義孝の神学』一九八六年、三〇九頁。
- (2) 『神学』四一号、東京神学大学神学会、一九七九年、三頁。
- (3) 図参照。
- (4) Caird, E.; An Introduction to the Philosophy of Religion. Glasgow. 1901. p. 16.
- (5) Ibid. p. 341.
- (6) Walker, W. et al.; A History of the Christian Church, 4th ed. New York. 1985. p. 630.
- (7) Moffatt, J.; Letters of Principal James Denney to his family and friends. Edinburgh. 1920. p. 4.